

子供研究試論

——子供理解の基底——

佐藤良吉

目次

(1)年少者と子供(一)年少者概念(二)子供不在 (2)生命的自然
 一 年少者の特質とその年代(一)第一原則(二)生命的自然
 (3)文化の創出一 子供本性とその時代(一)文化の観念(二)子
 供の誕生 (4)子供期消滅の時代(一)時代の変化(二)時代の制
 約(三)子供期時代の消滅(四)六つの疑問

(1) 年少者と子供

(一)年少者概念 今日、ふつう誰でも、年少者といえは子供のことを連想し、年少年代といえは、子供時代(子供期)のことに、きままっているときめてかかってしまっている。これが今日、日常一般の常識、あるいは年少者と年少年代についてのおおかたのイメージ、または観念ともいうべきはずのものである。

事実、今日においては、年少者とは確かに疑いもなく、子供それ自身のことを意味し、年少期年代とは他ならぬ子供期時代そのものを指している。この意味でみるかぎり、今日ふつう誰でもがもっている、上出両者についての観念、あるいはイメージ、または常識の脈絡に、何んの矛盾もいささかの撞着もあるわけではない。つまり今日においては、この両者はともに間違いなく、二者同体の一つの事実に違いないと認識されていて、両者の呼び名もこれまた同様、同一のことがらに名づけられた、二つの別名というほどの意味の違いしかない。

以上これが今日における年少者と、年少年代あるいは子供と子供期時代についての世上、定着した一般の観念あるいはイメージ、または常識と見做されるべきはずのものであってみれば、いまさらこのことについて、こと新しく疑問をさしはさみ、あげつらう余地も必要もないように見えてくる。とはいえそれにもかかわらず、上出世上普通の常識、あるいはイメージ、または観念の慣行に抵抗して、この両者の本質、あるいは歴史の事実と照して、あらためて見つめなおしてみた場合、今日、世間一般の前出両者についての観念、またはイメージ、あるいは常識が、いつの時代、いずれの場所においても、間違いなく必らず、今日と同じほどに通用していたかといえ、けっしてそうであったわけではないことに、いまさらのように気づかせられる。いいかえれば以上このことは、今日、世上どれだけ初出両者についての観念、あるいはイメージ、または常識が、日常一般誰でも通念であるからといって、それがそのまま、ただちにいずれの場所や時代の区別なく、通用するわけではないということである。つまりいってみれば、上出通常の常識あるいはイメージ、または観念は、どこまでも今日的同時代の意味の範囲内にかぎって、いえるにすぎないということである。事実、このことを歴史の事例に照して確かめなおしてみると、前述世上一般の通念が、明らかに歴史の舞台に登場しはじめたのは、歴史の次元でみるかぎり、今日からですらなお手の届く、近々わずか250年以前以降、比較的最近のことであるにすぎない。

そのことは例えば、わが国における「七歳までは神の子」(「日本の伝統的子ども観」所載、宮田登)の場合をみてもわかる。そこには今日の意味における、子供と子供時代観念の片鱗すらみられないだけでなく、年少者そのものも存在していない。

「子どものように」という昔話がある。愚かな嫁の失敗を題材とした笑話である。一人の愚かな娘が、年頃になって、やっと貰い手があり、嫁入りすることになった。母親は、先方に行ったら、「子どものようにせよ」と教えた。婚礼の式

が終わり、床入りとなると、娘は聲に「おしっこしたいので抱いて連れて行って」という。そして子どものように抱かれて小便しながら、窓の月を眺め、「お月さまいくつ、十三、七つ」とうたった。聲はあきれて手を離してしまい、嫁は糞壺へ落ちてしまう。すると今度は、「お月さん、お風呂、お風呂」とうたい出したという。このように子どものようにふるまった嫁の行動を愚行だとする考え方は、他村から嫁入りした嫁は、新しい集団の習慣になかなか従えないことを批難する立場から発している。興味深いことは、子どものようにうたったという歌が、「お月さまいくつ、十三、七つあらまだ若いや」というもので、これは江戸時代以来の童謡として知られている。十三、七つは、月の異称でもあるが、同時に十三歳と七歳という、女の子にとっての一つの区切りをつける年齢と、月の信仰との関連を暗示している。十三歳は成女になる直前の年ごろであるのに対し、七歳の方は何を意味しているのだろうか。

「七歳までは神の子」という諺は、全国的に流布している。これと対で「七つから大人の葬式をするもの」という諺もある。「七歳未満忌服なし」という表現も同様の心情によるものだろう。七歳にならぬ者は、喪の忌みには関係がないとされる。浄と不浄の分類の対象にならないのである。柳田国男は、六つ以下の子どもが死んだ場合、特別の埋葬地が設けられたことに注目している。それは児三昧、子墓などとよばれており、大人とは異なった葬法があった。たとえば家の床下や、雨落ちの下に埋めることがあった。その本意は、子どもの死により、体内に宿っていた靈魂が貴重な「若葉の魂」となり、ふたたび蘇生し易いように配慮することにあつた。だからいつでも靈界に帰すこともできる存在と考えられていたのである。青森県の東部一帯では、かつて小児の埋葬には魚を持たせたという。また家によっては紫色の着物を着せて、口にごまめをくわえさせたともいう。こうした習俗について、柳田国男は、生臭物をわざわざ使って仏教の支配を防ごうとしたものであり、それが「七歳までは神の子」という表現と関連するものと推察している。つまり大人の死者儀礼は、仏教の管轄となっているが、六歳か七歳以前は魂の再生をはかるため、魂が自由自在に動ける神の領域に置かれるべきだということで、神道や仏教といった体系の中に入らない、民俗信仰が背後に存在しているとみられている。七歳までの小児の生身玉は、身体を離脱し易いので魂を身体に鎮めて、離れさせまいとする呪法が、七歳までの通過儀礼には一貫していると考えられており、その場合、仏教の影響下に入ることは好ましくないという配慮があつて、「七歳までは神の子」と主張されているのである。

(二)子供不在 以上このことは、今日的同時代に先きだつ往昔、近世年代以前においては、今日的意味(観念)での子供は存在してはいなかったし、子供時代意識もまたなかったということを表徴している。つまりかつての

古い年代においては、年少者はいても、子供とは認められてはいなかったし、年少年代は事実として存在してはいても、それがただちに子供時代期とは、見做されていたわけではないということである。結局、このような往昔年代においては、子供不在と子供時代期欠落というのが、むしろ歴史の常態ですらあったということになる。以上これらのことを、手短かに納得するには、比喩的に例えば、今日的同時代の子供、あるいは子供時代観念を、仮りに何色か(例えば赤)に見做し、その時代の同色を歴史の区分に重ねあわせ、他の時代の色と比較して、確かめなおしてみればよい。そうすれば誰しもその当然の帰結として、他の年代に今日と同じ時代の色は、けっして見当りはしないことに、容易に気づくはずである。

以上これらのことから、いっそうより明らかに導き出しうる結論は、これまですでに繰り返えしみてきたように、今日、世上どれだけ上述の子供あるいは子供時代観念が、一般支配的通念であるとはいっても、しかしそれはどこまでも、結局、今日的同時代の常識の枠内の事実にすぎないということである。これをまた今日的同時代における、常識の非常識とみても、けっしていいすぎであるとばかりはいえない。

これら以上のことを、あらためて教えなおしてくれたのは、Ariésの著書、「子供の誕生」(「L'enfant et la vie amiliale sous L'ancien regime」杉山光信訳)であったといわれている。かれはそのことを同著において、西欧の場合についてみれば、今日的意味での子供と子供時代観念が、歴史の舞台に登場しはじめてきたのは、中世も末期年代以降、近世に入って以後のことではかないとしている。つまりそれ以前の時代においては、大人と子供の間、ことさらな区別があったわけではなく、存在していたのは、ただ両者の共生という事実だけであったということになる。もちろんそうはいっても、大人と子供とが、すべての点でまったく同じであったなど、いおうとしているわけではない。当然両者の間にあるあたりまえの違い、例えば年齢差や身丈けなど違いはいくらまでもないが、それらの違いを年少

者と年少期年代の成長のサイクルのなかに、意味のある違いとして、みていたわけではないということである。同著はその例証として、少なくとも18世紀年代までは、フランスにおいては、ことばのうえでみるかぎり、両者を区別する、子供それ自身の定義は存在してはいなかったとして、以下つぎの引用のように述べている。

近世フランス語の青年期の意味していたものは、人生の盛り、中年 (*age moyen*) なのであって、青少年期 (*adolescence*) を意味する余地はない。18世紀までは青少年期は子供期と混同されていた。学院のラテン語では子供 (*puer*) という言葉と青少年期 (*adolescens*) という言葉は区別されないままに用いられていた。国立図書館には、カンのジェスイット会修道士の学院の学籍簿、つまり成績評価をつけた生徒の名前のリストが保存されている。それには14歳の生徒が優秀ナル子供 (*bonus puer*) と記入されている一方で、その生徒よりも年少の13歳の同級生が成績抜群ナル少年 (*optimus adolescens*) と記入されているのである。バイエは並はずれて優秀な生徒たちについて論じたある著作のなかで、やはりフランス語にはラテン語の子供と青少年とを区別するための用語がないことを認めている。

同著はまた以上の論旨を、より具体的に裏付けるため、広く文芸や芸術の分野の遺産について分析し、西欧11世紀における細密画には、大人と子供を区別する、ことさらな表現技法上の違いはなかったとして、これまたつぎのように指摘している。

ほぼ17世紀までの中世芸術では、子供は認められていず、子供を描くことが試みられたこともなかった。だが中世芸術における子供の不在は器用さが欠けたため、あるいは力量不足のゆえであるとは考えられていない。それよりはむしろ、この世界のなかに子供期にとっての場所があたえられていなかったと考えるべきであろう。11世紀のある細密画は、今日の私たちの意識や視覚からかなり隔たっているように思われるある方向に、子供の身体の写真に際して芸術家たちが行っていた変形にかんする印象深い思想を私たちに示している。その画題はラテン語のテキストが幼な子たち (*parvuli*) と明確に記しているように、イエスが人びとにかれらの子供たちを、イエスのそばに来させるように求めた福音書のなかの一場面である。ところでこの細密画家は、イエスの周囲に8人の正真正銘の大人が集っているところを描いているのだが、この8人は子供期の特徴をなんら有して

はいない。描かれた8人の人物の背丈のみが唯一、かれらを大人と区別させるにすぎない。11世紀のフランスの細密画には聖ニコラが蘇らせた3人の子供が、やはり大人より小さな背丈で描かれているが、他の表現や特徴では大人となんら変わるところがない。

以上の趣旨はまた、postmanの所説にも、覗きみることができる。かれはその著書「子どもはもういない」(「The Disappearance of Childhood」小柴一訳)のなかで、例えばギリシャ人についてみると、ギリシャ人の場合も同様、子供観念は曖昧模糊としていて、けっして分明なものではなかったとして、つぎのように述べている。

古代の子どもにたいする態度については、ほとんどなにも知られていない。たとえば、ギリシャ人は、特別の年齢区分としての子ども期にはあまり注意をはらわなかった。ギリシャ人は、どんなものごとでも一言で言いあらわしたというが、このことわざは、子どもという概念にはあてはまらない。ギリシャ人たちが使っていた子どもとか青年とかをあらわす言葉は、すくなくとも意味が曖昧であり、幼児期から老年期までのほとんどすべてをふくんでいたように思われる。ギリシャ人が描いた絵は一枚も残っていないものの、かれらは、いっしょに暮らしている子どもたちの肖像をえがくことを価値あることだとは思っていなかったらしい。もちろん、残っているかれらの彫像に子どもの彫像は一つもない。

このほか同著はまた、上掲の趣旨に関連して、以下のような興味ある注も併わせ付している。

エディス・ハミルトンは「ギリシャ人の生活様式」で、あるギリシャ人画家についての言い伝えを示して、少年を描くことは別にめずらしいことではなかったのではないかという。あるギリシャ人の画家が一房の葡萄をもった少年の絵を展示したが、その葡萄がほんものそっくりだったので、小鳥たちが飛んできてついばんだ。大家として賞賛を受けると、画家はこう答えた。「私がいれば、少年が鳥を追いはらっていたらろう」。ハミルトンはこの言い伝えから、ギリシャ人の精神にとっては、実在するものくらい美しいものはないと考えられていたと推定する。葡萄は葡萄らしく見えるように描かれなければならなかったし、少年は少年らしく見えるように描かれなければならなかった。しかし、ギリシャ人の世界には、このような少年——この言葉を私たちの意味にとれば——の絵画は残っていない。

(2) 生命的自然——年少者の特質とその年代

(一)第一原則 上述みてきたことから、誰にでも明白な第一原則は、初出年少者と子供、年少年代と子供時代観念、またはイメージ、あるいは常識について、今日世上どれほど、両者混同の誤解が合理一般化されていたとしても、結局、この両者はもともとまったく別個、異質のことがらに属しているということにつきる。いいかえればこのことは、第二に年少者とその年代の特質は生物(動物)学上のヒト、つまり生命自然に系属する存在であるということにある。このことはまた上述両者の第一原則のなかに、年少者と子供、年少年代と子供時代とを、必ず同一視しなければならない、いかなる生物(動物)学上の根拠もないとみても同じことになる。Postman もこのことを、前出同著において、「私たちの遺伝子は、そのことについて何も示していない。」として、つぎのように述べているのには、十二分に納得しうる根拠がある。

子どもは、私たちが目にすることのない未来の時代へ、私たちが送る生きたメッセージである。生物学的に見ると、文化には、生殖、子孫を残すことが必要であり、将来とも文化がそのことを忘れるようになるとは思えない。だが子どもという社会的観念がなくても、文化はりっぱに存在しうる。乳、幼児期とはちがい、子ども期は生物学上の概念ではなく、社会的につくりだされたものである。私たちの遺伝子は、子どもか子どもでないかについてはなにも示さない。生存の諸法則も、大人の領域と子どもの領域とのあいだに区別をつけなければならないとは言っていないのである。

(二)生命的自然 以上これらの事実にてらして、いっそう確かにいいうることは、年少者とその年代とは、ともに生物(動物)学的範疇に系属する概念であって、これをまた生物(動物)学的生命自然とよんでも、その意味は同じことになる。そのことは例えば、「生命自然——年少者とその年代」(「子供と生活」所載、佐藤良吉)における、つぎの引用にてらしてみてもわかる。

年少者とその年代の特質が、生物（動物）学的生命自然にあることについて、手短かに納得するには、ひとがこの地上に出現して、まだ間もない遙かな時代における、ひとの有様を思いうかべてみたらよいと思います。……もっともそうはいっても、その当時のひとの有様が、果してどんなものであったかについては、今日の科学技術の進歩をもってしても、専門家にすら、なおわからないことづくめということですから、私たち素人に、わかるわけがないと考えるひとがいたとしても、むりからぬことです。しかし私たち素人は、その代わりに、子供時代から大人のいまですら、空想の翼を自在に広げて、この気の遠くなりそうな古い時代を、十二分に思いみることの特権をもっています。……このように気ままに考えなおしてみれば、そんなことは不可能だなどと、初めからあきらめてかかる必要は、少しもないように思います。

ところでひとと他の動物の大きな違いは、ひとが文化を身につけた存在だということにあるといわれています。……しかしこのようなひと、何百万年、あるいは何億万年もの大昔の時代から、そうであったわけではないはずです。事実、当時のひとは、ひととはいっても、図鑑や本のイラストなどにえがかれているように、体は毛で覆われ、背が低く、口が突き出ている、容貌や体つきは、ひとよりもむしろけものに似ていて、文明のかけ、文化の片鱗すらない、野蛮未開の生活をしていたはずです。

いずれにしても、この地上にこのようなひとが、いつごろ出現し、どんな生活をしてきたか、詳しいことはわからないにしても、古い地層から、これまでつぎつぎに発見された人骨や歯の化石は、専門家ばかりでなく、私たち素人の興味をも、引きつけずにはおきません。……こうした化石のうち、一番古い時代のものは、Dart によって、南アフリカ連邦、第三紀末の地層から発掘（1924年）された、子供の頭骨であるといわれています。脳の発達はゴリラ程度、類人猿より高い知能をもち、南のサルという意味で、アウストラロピテクス (*Australopithecus Africanus*) と名づけられました。……つぎに古いのは、1927(昭和2)年、Black (1884—1934)によって北京郊外周口店で、最新世中期の地層から発掘された北京原人 (*Sinanthropus Pekinensis*) のものと、1890(明治23)年、Dubois (1858—1940)によって、インドネシア、ジャワ島トリニールの最新世中期の地層から発見されたジャワ原人 (*Pithecanthropus Erectus*, 直立猿人) の大腿骨と歯です。これらのひとの祖先たちは、どんな有様で、またどんな生活をしていたのでしょうか。Sigerist (1891—) はこのようなかれらの生活を「文明と病氣」 (*Civilization and Disease*, 松藤元訳) のなかで、「文明は非常に年若い。五十万年間、人間は体は毛で覆われ、食物を探し廻り、洞くつのなかで眠り、森林のなかで野獣のような生活をしていた」と述べています。

それはともかく、このようなかれらの有様を思いうかべて、辿りつく結論は、

かれらは確かにひとには違いないにしても、文化や文明の恵みからは、遠くかけはなれた、野蛮未開、生命むき出しの生活をしていたに違いないということですから。いうまでもなくそこには、大人も嬰兒もいたはずで、年老いたひとから若いひと、男も女もいたはずで、しかしそこでほんとうに生命を保っていたのは、大人や嬰兒、老年や若年、あるいは男や女という以上に、疑いもなくヒト、つまり生命の凝集としての生命自然ではなかったのでしょうか。年少者とその年代における生命自然について、より理解を深めようとするには、以上このような、生命の始源にまで溯って、生命の淵の深みを、覗きみる必要があります。年少者とその年代の生命自然と、教育の秘密を解き明す鍵が、間違いなくここに、かくされていると思うからです。年少者と年少年代の特質を、あえて生物(動物)学的生命自然に見出そうと試みる所以です。

ひとの自然生命が、その本源的原始野生(自然性)のゆえに、今日のわれわれが想像する以上に、素朴強靱なものであったであろうことは、大人がそう考えるだけでなく、今日世代の子供たちも、また同じように予感している。そのことは例えば、「大昔の世界と人びとの生活」(北川淳一郎、初等科5年)における、つぎの作文をみてもわかる。

ぼくはこの春休みに、お母さんとデパートに行った時、「日本の歴史」という、おもしろそうな本を見つけました。それには大昔の地球の様子や、そのころの人びとのことが書かれていました。ぼくはそれを見て、大昔の地球の移り変わりや、人びとの生活の様子が知りたくなりました。調べてわかったことを、整理して書いてみますと、つぎのようになります。

(1)今から数億年も昔の中生代には、日本列島は、まだ形ができていなかった。やがて地殻変動がおこり、1千万年ほど以前の第三紀ごろに、今の日本に近い形ができた。(2)この期間、地球の大変動の影響で、恐竜の仲間たちは絶滅した。そのあとゾウなど哺乳動物の時代がやってきた。(3)50万年まえの第四紀には、何回か地球上の大量の水がこおり、南極や北極をはじめ、地球の $\frac{1}{2}$ ほどの広い面積が、氷にとざされた。(4)大量の水が氷りついた結果、この分だけ海水が減り、大陸と地続きになった。(5)この時期に、ナウマン象が渡ってきた。北からはマンモスがきて、これらの動物を追うようにして、人類もやってきた。(6)氷河期が終わると、大陸と完全に引き離され、いまの日本列島の形ができた。えものを追って、やってきた人たちが住みついて、日本人の祖先になった。この人たちは、岩かげや洞穴に住み、狩りょうや漁をして、生活していた。(7)石で作った、つぎのような打製石器を使っていた。1)皮はぎ(動物の皮をはぐのに使う。)2)穴掘り(土を掘

るのに使う。) 3)きり(毛皮や木などに穴をあける。) 4)肉はぎ(動物の肉を骨から取る。)など、石を割って作る、簡単なものだった。(8)今から1万2千年ぐらいまえになると、人びとは粘土で作った、土器(縄文)を使いはじめた。それから5千年間ほどを、縄文時代という。

ぼくはこうしたことを調べていて、気づいたことは、野生(自然)の生命の強さということでした。大昔(大古)の人たちは、今のぼくたちには、とても想像できない、苦しい生活(未開野蛮)をしていたはずですが、しかしその人たちは、それ以上に、それに打ちかって、生きのびる生命力をもっていました。ぼくは生命自然の強さということに、何よりも心を打たれずにはられません。

(3) 文化の創出—子供本性とその時代

(一)文化の観念 上出すでにみてきたように、年少者とその年代の特質について、第一に生物(動物)学的生命自然と見做すことによって導き出しうる利点は、その対置概念としての文化の観念、つまりこの場合においては、子供本性あるいは子供時代期観念について、いっそうよりその本質を明確になしうるということにある。これをまた生物学的自然概念としての生命自然、いわば年少者とその年代期に対して、文化の観念——子供とその当代の両者の対置；あるいは対概念図式とみても、その意味は同じことになる。

いずれにしても、ひとはこれまで、以上両者の第一原則を忘失して、しばしば常識の日常性に日常化され、両者一つのことごらのように、混同錯覚してきたきらいがあった。その結果ひとは誰でも、初出みてきたように、年少者といえ、子供のことにきまっていると考へ、年少年代といえ、当然子供時代のことであると独りぎめして、常識のなかの非常識の落とし穴に落ちていることに気づかなかつた。いずれも常識の日常性に慣れて、両者の本質に目を注ぎ、見つめなおすことをしなかつた結果である。これまた生物(動物)学的自然概念、つまり年少者とその年代、および文化の観念、すなわち子供(子供本性)とその時代期との両者対置概念の歿却、または混同の当然の帰結ということになる。

いうまでもなく、この場合の文化(culture)とは、その語源「耕やす」(cultus)

にてらしても明らかなように、ひとが原自然を対象に働きかけ、手を加え、自然のままでは存在しないものを創出するいとなみ、およびその所産のことである。そのことは文化の語源、「耕やす」にまで溯って、確かめなおしてみればわかる。そのことはまた「文化の観念」(「子供と生活」所載、佐藤良吉)における、つぎの引用をみてもわかる。

文化(culture)ということばは、もともと「耕やす」(cultus)という働きに由来しているといわれています。しかし今日では、この二つのことがらを結びつける、実感のともなった、納得のいくことばの響きは、感じられそうにもありません。それは今日的文化のありようと、「耕やす」という、もっとも素朴で、野生的な生活や行為との間に、あまりにもかけ離れた距離ができて、この二つのことがらを結びつける、関わりの糸が、断ち切られた結果であるともいえそうです。

そうであってみれば、もともとこの二つのことがらが、まったく同じ働きであることについて、手短かに納得するには、どうすればよいのでしょうか。それには文化を生みだすいとなみと、文化の語源「耕やす」との結びつきについて、そのことばの本源にまで溯って、検討しなおしてみればよいように思います。

ところでここで文化というのは、すでにみてきたように、ひとが自然を対象に働きかけ、手を加え、自然そのままでは存在しないものをつくり出すいとなみ、およびその所産のことです。……以上この点を念頭に、ここに手懸りを求めて、あらためて学びなおしてみますと、結果的に文化と「耕やす」行為との間に、実感の伴った理解ができるようになるはずです。

そのことをいっそうわかりやすくするため、つぎに比喩的な例を述べて、考えてみたいと思います。……例えばここにひとがいて、文化の語源「耕やす」という行為そのままに、仮りに山野や地平に手を加え、切り拓き犁や鋤を用いて開墾し、耕す働きをしたとします。この場合対象となる山野や地平は、文字通り自然そのものですが、手を加え、つくり出された耕地は、以前の自然とは異なる、所産としての田畑です。存在している場所は同じでも、そこにあるものは、ひとが自然に働きかけて、つくり出さなければ存在しない、耕地(田畑)という別のものです。しかもこの耕地は、文字通り、ひとが「耕やす」という行為をしなければ、存在しうるはずのないものです。事実、「耕やす」といういとなみがなければ、例えどれだけ広々とした山野や、地平があったとしても、ただそこに山野があり、地平が広ろがっているというだけのことです。……こう考えてみますと、ありのままの自然と、「耕やす」という行為、あるいはその結果としての所産の間に、切っても切れない、密接な関係のあることがわかります。

そのことはまた、つぎの事実を目をむけなおしてみれば、いっそうよくわかる

ように思います。……すでに述べたように、ここに仮りに、耕地がつくり出されたとしましょう。しかしこの耕地（田畑）は、何かをつくり出すためのものです。耕地ができて、耕地そのままの自然では、何一つ生産されはしません。ひとはその耕地に、さらに手を加え、田畑を肥やし、種を蒔いて世話をやき、野菜や果樹を育て、農作物を培育します。この場合、野菜や果実、稲や麦は、ひとが文字通り田畑という自然に働きかけ、手を加えてつくり出した所産です。いずれもひとの手が加わっているという意味で、ありのままな自然そのままのものとは、異なったものです。自然の性質をもちながら、自然そのままのものではありません。姿や形が似ていても、野生（自然）を超えたものです。一方が自然そのままであるとすれば、他方はつくられた自然です。ひとの手が加わって、つくり出された所産という意味で、これをまた文化とよんでも、同じことになります。……このようにみてきますと、文化が初出ひが自然を対象に、それに手を加え、自然そのままでは存在しない、何かをつくり出すいとなみ、あるいはその所産のことであることが、文化の語源「耕やす」という行為との関係のなかで、いっそうはっきりします。

しかしひとが対象と見做す自然は、何も上例のような、山野や地平などの地理的自然に、かぎっているわけではありません。そのことはひとがこの地上に、ようやく生活を始めた、未開原始の生活の一端を思いみれば確かめられます。ひとはこうした、まだ農耕、牧畜を学ぶ以前の時代には、おそらくは山野に自生する植物や木の実をあさり、あるいは鳥獣を追い求めて、移動転住の生活をしていたはずで、このような時代には、仮りに鳥獣を捕獲する場合、誰でも素手よりも、道具を用いた方が、都合がよいことに気づいていたはずで、こうした時、目のまえに一個の石塊が落ちていたとします。石塊が地上に落ちているというだけでは、その石の形や色、重さなどがどうであれ、自然そのままの石塊にすぎません。しかしここにひとがいて、その石の塊りの所在に気づき、手に取って打ち砕き、形を工夫して、鳥や獣を捕獲する、つぶてとして用いたとすれば、それは十二分に立派な道具、つまり文化が出現したことになります。文化はひとが自然を対象に、それに働きかけ、手を加え、自然そのままでは存在しないものを創り出すいとなみ、そしてそれに伴う所産のことだからです。

しかしまた文化は、上例みてきた地理的自然や、物質自然のみを対象にするわけではありません。……例えばここに、ひとの集り、ひとの衆合にすぎない群れ、群集がいたと仮定します。それがどれほど多数の群れ、男や女、大人も子供もいり混った大群集であったとしても、ただの群れにすぎない場合には、単なるひとの集り、鳥合の衆ということになります。結局、どれほどひとが多数いても、そこにただひとがいるというだけなら、そこに石塊や木片があるのと、それほど変わりはありません。しかしこのような、ひとの自然な集りという場合でも、この

ひとの集りの自然状態に、目を注ぎ、手を加え、慣習や習俗をもち込み、価値や道徳、あるいは法律や規則で秩序立てたとすれば、そこには自然状態ではない社会が出現します。単なるひとの群れは、動物の群れ自然とそれほど変わりはありませんが、社会はひとがひとの群れ自然に働きかけて作り出した制度です。上出物質自然を対象に産出した文化が、物質文化であるとすれば、この場合の文化は、制度的文化とよぶにふさわしいこととなります。

(二)子供の誕生　すでに繰り返えしみてきたように、文化とはひとが自然を対象にそれに働きかけ、自然そのままでは存在しえないものを創出するいとなみ、あるいはその当為の所産のことである。しかしひとが対象とする自然は、上述みてきた地理的自然や物質自然、あるいはひとの群れ自然だけにつきてはいない。文化はまたひとの内面世界における人間自然(human nature)をも対象とする。事実、人間自然もまた、地理的自然や物質自然、あるいはひとの群れ自然と同じほどに、文字通り自然そのものであることに、少しの変わりもない。この意味でひとが物質自然を対象に物質文化を創出し、ひとの群れ自然を対象に、制度的文化を創成したように、ひとの内面自然を対象にすれば、当然そこに精神文化が熟成される。

以上このような文化のありようを念頭に、子供とその時代観念について、あらためて確かめ考えなおしてみると、子供本性とその時代観念も、また年少者と青少年代生物学的自然を対象とした、精神文化の一領域にほかならないことがわかる。

そのことは例えば、「自然から文化へ——子供の誕生」(「子供と生活」所載、佐藤良吉)における、つぎの引用の趣旨にてらしてもうなづける。

ひとは山野や地平などの地理的自然に、犁や鋤をいれて、田畑をつくり、稲や麦、野菜や果樹を培育し、農産物を生産します。……田畑はひとが自然に手を加え、自然のままの山野自然から、自然そのままでは存在しない、耕地につくり変えたものです。田畑ができて、自然のままの耕地では、一粒の米や麦、一個の果実も、一束の野菜も手にすることはできません。自然のままの田畑に、水をやり肥料を施し、播種し、芽や幹を育て、その結果の所産が米や麦、あるいは野菜や果実です。……このように自然のままの山野を田畑にし、田畑に力を貸して農

作物を生産する当為とその結果は、りっぱな農文化以外の何ものでもありません。物質文化はまた、ひとが物質自然を対象に、物質自然のままでは存在しないものをつくり出す当為と、その結果のことであり、制度的文化は、ひとがひとの群れ自然を対象に、人工的につくり出したもの（所産）です。

これら諸般の文化に対して、ここでいう精神文化は、ひとがひとの内面自然 (human nature) を対象に、それに働きかけ、人間自然のままでは存在しない、何かを創出するいとなみと、その当為の所産のことです。歴史の事実学びなおすまでもなく、精神文化は、ひとがけものの域から、しだいにひとの段階へと進化し、生活にゆとりができ、こうしてひとがひとの内面自然に目を向け、それを対象に、働きかけた当為の所産です。したがって精神文化は、ひとの内面自然の本質を、あらためて見つめなおし、追求しつづけて、人間本性（自然）の特質をもとに創出した価値やもの、例えば学問や思想、道徳や宗教、感性や芸術性などということになります。

以上このような文化観念の脈絡のなかで、子供あるいは、子供時代観念について、学びなおしてみますと、これまた文化の観念の範疇内のことであることは、いうまでもなく明らかです。ところでどのような文化の場合でも、文化を生み出すからには、働きかけの対象となる、自然が存在していなくてはなりません。いうまでもなく、ここで子供あるいは子供時代観念の創出という場合、その対象となる自然は、年少者と年少年代内面自然です。年少者と年少年代が、その特質において、生物（動物）学的生命自然であることは、すでに繰り返えてみてきた通りです。……その年少者と年少年代における、内部生命の野性自然に働きかけ、年少者とその年代自然のままでは存在しない、それ以上それを越えたもの、つまり子供（子供性）とその時代観念の創出、これがこの場合の文化（観念）ということになります。

その働きかけの手法は、この場合、年少者とその年代自然に対する愛護と保育、助成と援助（教育）です。……年少者と年少年代生命自然に愛を感じ、親しみを覚え、肉体につつま、愛撫し、愛憐と希望を助産の刺戟剤に、年少者とその年代自然に働きかけ、年少者と年少年代自然そのままでは存在しない、それを越えた、子供本性の噴泉と熟成を促さなくてはなりません。それはちょうど農人が、田畑自然に犁や鋤をいれ、水をやり肥料を施し、田畑自然を母胎に、農産物を培育するのに似ています。

ひとはこうして、年少者と年少年代内部生命自然を対象に、農人があたかも田畑自然から、植物や果樹の培育、所産をなすように、ありのままな年少者と、その年代自然以上の本質価値、生命の創生助産を促す。その助

産の結果、創出誕生した新しい生命、それが子供(子供本性)と、その時代(子供期)ということになる。子供(子供性)の誕生と、子供時代の発見とは、文字通りこのことを指している。

以上みてきたところから、確かにいえることは、嬰兒は母を母胎に誕生するように、子供本性と子供期時代とは、年少者とその年代自然を母として、誕生するほかないということである。しかし嬰兒は母を母胎にして生まれるとはいっても、母とはまったく異なる、別個の肉体と生命を保有している。それと同じように子供と子供時代もまた、年少者とその年代自然を母としながら、それを越えたより以上の子供生命(子供性)と、その価値の時代(子供期)を併わせもっている。これをまた前者を野生(自然)そのままの原生命と年代であるとみるとすれば、後者は文化的生命つまり人間(子供本性)的生命と、その時代といっても同じことになる。いってみれば年少者とその年代は、所与としての野生そのままの生命自然であるのに対して、子供と子供時代とは、創生された価値的生命ということになる。

このようにして辿りつく結論は、年少者と子供、年少年代と子供時代とは、外見や外貌は同じようにみえても、この両者の本質は、まったく異なったものであるということである。その基底になっているのは、年少者とその年代の場合は、生命野生の生物学的自然であるのに対して、子供と子供時代期は、文化の創出つまり子供本性(子供性)と、その時代の本質価値(意味)それ自身ということになる。この点でみるかぎり、この両者は見かけ上、どれだけ同じように粧ってはいても、子供本性とその時代の価値(意味)の有無によって、両者ともに画然と区分けできる。

いずれにしても子供本性と子供時代は、年少者とその年代自然に対してなす創出と熟成、あるいは創生と助産の手助けなしには誕生しない。その助産は年少者と年少者自然に働きかける、創出のための援助、つまり慈育や教育ということになる。その助成あるいは援助に促されて噴泉した生命、それが子供本性と子供時代期の本質価値(意味)ということになる。このよ

うにしてここに野生のヒト(自然性)から、ひと(人間性)としての子供本性の誕生と、その時代(子供期)における、価値(意味)の発見が実現する。子供の誕生と子供時代期の発見とは、このように文字通り子供本性の誕生と、その時代期の価値(意味)の発見ということであるが、そこにはまた同時に、子供理解の基底と、教育の秘密を解き明す鍵が、しまい隠されていることに、十二分な注意を促して、見つめなおしてみる必要がある。

(4) 子供期消滅の時代

(一)時代の变化 今日、時代が激しく揺れ動いていることについては、誰でも十二分な生活実感を通して知っている。とりわけこの20年以前以降の技術革新と、それに伴う高度経済成長、あるいは情報化社会の出現は、われわれを变化の波にさらしつづけて、止まるところを知らない。しかも以上これら变化の波は、上述の産業技術社会や経済界方面、あるいは情報化社会などの諸領域だけでなく、広く個人の私生活の足もと近くにまでおよんできている。さらにこのような変化は、わが国の場合をふくめて、全地球的規模でいつでもどこでも進行している。Tofflerが以上このことを「未来の衝撃」(「Future Shock」徳山二郎訳)のなかで、以下引用のように述べているのには、きわめて十二分な理由と根拠がある。

過去三百年間、西洋社会は、变化のあらしに巻き込まれてきた。いま、このあらしは、静まるどころか、ますます勢いを増してきているようだ。この变化のあらしはかつてないスピードと衝撃力をもって高度に産業化した国家を押し流し、そのあとにさまざまな種類の奇妙な社会的植物群——サイケ調の教会、「解放大学」から、北極の科学都市、カリフォルニアのワイフ交換クラブまで——を生み出している。それはまた同時に、風変わりな個性をも育てる。12歳の子どもがすでに子どもらしさを失ったり、50歳のおとなが12歳の子どもようになってしまったり、金持ちが貧乏人のまねをしたり、コンピュータ・プログラマーが、LSDに浸ったりする。汚れたデニムのシャツを着た無政府主義者が、実は、どうしようもない順応主義者(コンフォーマリスト)であったり、逆に、きちんとしたシャツを着た順応主義者が、むちゃくちゃな無政府主義者であったりする。さらに

結婚しているカトリック神父もいるし、無神論者のプロテスタント牧師とか、ユダヤ人でありながら禅の信者という者さえいる。そしてまた、視覚に訴える超現実的の絵画芸術があり、プレイボーイクラブ、同性愛専門の映画館、アンフェタミン(刺激剤の一種)、トランクライザー等の薬品、怒り、余剰、忘却——その忘却のなんと多いことか。

以上このような変化の激波は、いったん堰を切って流れ出すと、大洪水となって、社会の全域を浸し、さらに個人生活の母胎である、家族や家庭にまで影響がおよんでくる。Tofflerはこのことを、前出同書第11章「破壊される家族」のなかで、「その洪水はさらに、われわれの私生活のなかに深く浸透し、家族というものに対して、これまでまったく例のないような苦痛を与えることになる。」とみて、以下のように指摘している。

家庭はこれまで社会の巨大な緩衝帯と呼ばれてきた。家庭は世間と闘っている人が傷つき、疲れきって帰ってくる場所であり、ますます目まぐるしくなっていく環境のなかでの唯一のいこいの場であった。しかし、この緩衝帯も、超産業化革命が進展するにつれて、みずからがひき起こす衝撃にゆさぶられることとなる。(1)母性の神秘 もし、これから先、数十年の間に家庭に一大打撃を与えてこれをつくがえす力があるとすれば、そのなかで一番はっきりしているのは人間誕生の分野における科学技術の影響である。自分の子どもの性別を前もって決めたり、知能指数や容姿、個性などを生まれる前にプログラムしたりすることは、今や現実的にできるのだと思わなければならない段階にきている。受精卵の人工挿入、試験管ベビー、双児でも三つ児でも好きなように生める飲み薬、受精卵を好きなときに行って買えるベビー・センター——こういったことはすべて、これまでの人間の経験からはあまりにもかけ離れているため、社会学者や世間一般の哲学者の目ではなく、詩人や画家の目で未来をみる必要がある。……妊娠し、子どもを産むということは「大多数の女性のもつ、一つの大きな創造への欲求を満たしてくれるものである。大多数の女性は子どもを産めることを誇りに思っている。子どもをみごもった女性に対しては、洋の東西を問わず、芸術、文学のなかでも特別な賞讃の言葉がよせられている」と言っている。ところがもし「生まれてくる子どもが、文字どおりその母親のものでなく、別の女性の優生学的にすぐれた卵子が彼女の胎内に植えつけられたものであったり、あるいは培養皿のなかで育てられたりしたものとなったりしたら」、母性崇拜の精神はどうなるであろうか、とワイツェン博士は疑問を投げかけている。それでも女性の重要さが認められるとしたら、それはもはや女性だけが子どもを産めるという理由によるものではない

くなるであろう、と博士は言っている。少なくともいま、われわれは母性の神秘を葬りさろうとしているのだ。……母性ばかりでなく、親というものの概念自体が根本的に修正されようとしている。事実、子どもが生物学的にふたり以上の親を持つことができる日も間近いようである。……もし実際に受精卵を買えるようになったら、親という言葉には生物学的な意味はなくなり、法律的なものになる。そのような取引は厳重に管理されないと、受精卵を買って、それを試験管のなかで育て、それからまるで信託基金でも積み立てるように、最初の子どもの名義で別の受精卵を買うというようなグロテスクなことにもなりかねない。(2)流線型家庭 彼らがまず手をつける簡単な試みは、家族の構成をすっきりと流線化してしまうことである。前産業時代の典型的な家族には、子どもが大勢いたばかりか、祖父母、叔父、叔母、いとこなどの係累も多数あった。このような大世帯は、世の中がゆったりしていた農耕社会には適していたが、よそへ移したり、移ったりすることはたいへんな仕事であった。つまり、それには機動性がなかったのだ。……産業化社会の時代になると、多くの労働者たちは仕事を求めて、いつでも住む場所を変えられるように常に準備を整えておかなければならなくなった。そして必要なときは、何度も引っ越した。かくて、昔の大世帯は重荷となる係累を徐々に切り捨てて、いわゆる核家族が出現した。この核家族は両親と少数の子どもだけの最も身軽な最小単位で、移動もきわめて簡単である。この新形式の家族は、従来の大世帯よりはずっと機動性に富んでおり、それは世界のあらゆる産業国で家族の標準形式となった。……しかし、経済や科学技術が発展する次の段階である超産業主義時代にはいると、家族はいままで以上の機動性を必要とする。かくて未来の人の多くが、家族を最も身軽にしておくために、子どもをつくらず、家族を基本的構成の最小限のままにしておくために、ひとりの男とひとりの女にとどめておくことも考えられる。お互いに仕事もよくつりあったふたりだけならば、教育や社会的障害にあってもうまく切り抜けることができるだろうし、職場を変えたり、引っ越しをするのも簡単である。このようなふたりの家族は、従来の子どものふりまわされている家族よりうまくいくに違いない。事実、人類学者マーガレット・ミードは、未来の社会は「親が子どもの養育を主要な仕事とする家庭は、少数な場合だけ」に限られる。それ以外の人々は「歴史が始まって以来、はじめて個人として自由に行動することができるようになるだろう」と言っている。……子どもをまったくつくらないということに対する妥協策として、子どもをつくる時期を遅らせることになるかもしれない。今日の夫婦は、仕事第一主義でいくか、それとも子どもを生んで育てることを第一にすべきかの決定ができずに悩むことが多いが、将来は多くの夫婦が退職引退後まで子どもを生み育てるという問題を延期するため、この悩みをもたなくてすむことになる。……これは今日の人々には奇異に聞こえるかもしれないが、いったん子どもを育てることに生

物学的意味合いがなくなると、若いうちに子どもをつくることは、単にこれまでの習慣がそうだったからということ以外の理由がなくなる。自分が仕事から引退するのを待って、それから受精卵を買ってもよいではないか。そうすれば、若い人や中年の夫婦には子どものない人が多くなり、歳を過ぎた人が幼児を育てるということが一般的になってくる。引退後つくる家庭は社会的に有意義なものになるだろう。(3)生みの親と育て専門の親 しかし、もし少数の家族だけが子どもを育てるとしたら、育てられる子どもたちは、自分が生んだ子どもでないといけない理由があるだろうか。育児専門業とでもいうような、他人の子どもを養育する役割を果たすようなシステムをつくってもいいではないか。……なかならず子どもを育てる技術は世の中の親たちにすべて備わっているわけではない。脳外科の手術を「誰にでも」頼む人はいないし、その限りでは、株式や公社債を売る場合も同じである。公務員になるにも、たとえ下級の地位につく場合でも、能力テストをパスしなければならないのだ。ところが、人間の子どもの育てることとなると、その子どもが生物学的にその親から生まれたものでありさえすれば、その親の精神状態や道徳的資格を問いたすことなく、ほとんど誰にでもやらせる始末である。子どもを育てる仕事はますます複雑になっているというのに、それは依然としてアマチュアである親たちが勝手ほうだいにやれる分野となっている。いまや現在の体制にヒビがはいり、超産業化革命がわれわれの上のしかかっている。青少年犯罪はますます増加し、何万、何十万という青少年が家を飛び出し、そしてまた、科学技術の発達したあらゆる社会の大学では学生が紛争を巻き起こしている。このような社会情勢になってくると、道楽半分の親たちの態度に強い批判の声が上がってくることになる。……本当の親あるいはこの広告にある生みの親は、今日の名づけ親、つまり、親しみやすく必要な時には援助の手をさしのべてくれる、役に立つよその人というような存在になるだろう。こうして、社会全般からいえばいろいろと遺伝的に違った子どもが生まれ、その世話は子どもを育てることに必要な知性と感情を兼ね備えた父母のグループに任せていくことになるのである。

(二)時代の制約 上述みてきたように、時代の変化は、今日、各方面各領域に、はかり知れない多様複雑な影響をおよぼしている。政治や経済、産業や技術、文化や教育の諸方面においてはいうまでもなく、道徳や宗教、習慣や習俗、個人生活もまた、流動の渦中のなかにおかれていることに少しも変わりはない。いま時代の激流は、好むと好まざるとにかかわらず、すべてを根本的に、かつ本質的に根底からつくり変える働きをしている。

とりわけ子供と子供時代観念は、時代の文化の所産であってみれば、時代の変化と無縁であるわけにはいかない。これをまた時代の支配、制約とみても、その意味は同じことになる。これに対して他方、年少者と年少年代は、時代の変化とは無関係に、時代の制約と支配を超える。子供あるいは子供時代観念が、時代制約的な文化の所産であるに対して、年少者とその年代は、第一義的に疑いもなく、生物(動物)学的生命自然に依拠しているがためである。生物(動物)学的年少者とその年代生命自然が、時代の支配制約から自在であることは、ひとがこの地上に出現し、生活をいとなむようになってこのかた、いずれの場所にも年少者はおり、いつの時代にも年少年代は存在していた、事実一つをみてもわかる。年少者と年少年代が、時代の変化やあるいはその支配制約をはなれた、生命自然の脈流であることについては、例えば「生命を見つめる」(「子供と生活」所載、佐藤良吉)における、つぎの引用の趣旨にてらしてもうなづける。

小さい子供たちどうしの話をきいていますと、「ヒトはサルから生まれた。」とか、「ヒトの祖先はサルだ。」などと、物知り顔にいいあっているのを、耳にすることがあります。ところがそうした子供でも、「ヒトは動物だ。」などと、いおうものなら、「ヒトは動物でなんかないよ。」と、たちまち反撃されたりします。「生きていて(生命があって)、動くものは、みな動物というのです。」と調べてみたところで、簡単には納得してくれません。つまり子供たちにしてみれば、ヒトは動物には違いないにしても、ほかの動物とは別な、ひと(人間)だということなのでしょう。

ひとは動物ではあるが、特別な生きもの(動物)だという考えは、子供の場合だけでなく、大人もまた昔から誰もがもっていました。例えばひとは自らを、ホモ・サピエンスとよび、万物の霊長だなどといっています。万物というのはもちろんすべてのいきもの(動物)、霊長というのは、ふしぎな力をもった、かしらというほどの意味です。つまり万物の霊長とは、すべてのいきものなかで、並すぐれた能力をもつかしら、結局、ひと(人間)というわけです。

たしかにひとは他の動物にはない、すぐれた能力をもっています。例えばひとはひと自身、鳥のように空を飛ぶことはできませんが、その代わり飛行機を發明して、鳥以上に自在に飛ぶ工夫ができます。ひとはそのままの力では、象にかないませんが、機械を用いて、象の何倍もの力を出すことができます。ひとは魚の

ように、海を泳ぐことはできませんが、船を造って、海を渡る技術を身につけています。

ひとが万物の霊長であることは、以上このような例にてらしてみてもわかります。往昔、コメニウス (Comenius) もまたこのことについて、その主著「大教授学」(Didactica Magna) 第一章において、「人間は被造物のなかで、最も高く、最も絶対的にして、しかも最も卓越した存在である。」と、以下引用のように述べています。(1) 昔ピタコスが、「汝自らを知れ」という、有名な言葉を告示した時、賢人たちはこの言葉に対して讚歎おく能わざるものがあつた。そしてこの言葉を強く人々の胸裡に印象づけるために、これは天より降った言葉であると公言した。しかもこれを黄金の文字に記して、多数の人々が集まるデルフォイのアポロンの宮に掲げたのである。けだしこれら賢人たちの措置は、思慮深くかつ賢明なものではあつたが、彼らの公言したところは誤りであつた。とはいえそれも事実と符合しない訳ではないのであつて、我々はこのことを、彼らよりもっとた易く理解することができるのである。(2) というのは、聖書の中に響き渡る天よりの声は、要するに次の言葉以外の何ものでもないからである。「聖書」には言っている。「おお人々よ。我を知れ、そしてまた汝自からを知れ。換言すれば永遠と知恵と浄福との根源なる我(すなわち神)とわが被造物であり、似姿であり、喜びであるところの汝(人間)自からとを」。(3) というのは我(神)は汝(人間)をば、永遠の伴侶たるべく運命づけ、天と地と、天地の間にある一切のものを、ことごとく汝の用いるに任せたからである。また我はただ汝にのみ、存在、活力、感覚、理性などのすべてを一丸として与え、他の動物には僅かにこれらの中の一部を与えたにすぎないからである。かくて我は汝をあらゆる被造物の支配者として創造したのである。すなわち羊も牝牛も野獣も、空の鳥も海の魚も、ことごとく汝に従属せしめ、汝を栄光と名誉とを以て飾つたのである(詩篇86—9)。最後にまた汝にとって何一つ欠けたるところがないように、我は私の本性と汝の本性とを、永遠に結合せしめ、我自身を汝に与えた。これはたとえ眼に見えるものにしても見えないものにしても、他の被造物に於てはあり得ないことである。というのは天地の間にある被造物の中、何物か神がその肉体の中に於て顕現し、天使において認められることを誇り得るものがあるであらうか(テモテへの前の書3—16)。「而してそれはただ単に天使たちが、見たいと希つたところのものを見かつこれに驚くばかりでなく」(ペテロの前の書1—12)、「肉体の中に顕現せられたる、神、すなわち神の子にして人の子なる神を敬仰せんがためである」(ヘブル人への書1—6, ヨハネ伝福音書1—52, マタイ伝福音書4—11)。「故に汝は私の被造物の中、その仕上げであり、神の代表者たる最も卓越したものであり、私の栄光の王冠であることを知るべきである」と。

しかしこのような、万物の霊長と自認するひとも、ひと(人間)であるより、

まずヒト（動物）であるほかなかった、野蛮未開の時代においては、どうであったのかについて、考えなおしてみる必要があるように思います。満足に住む場所すらなく、裸同然の生活をし、文明のかけ、文化のひとかけらすらない、野生（自然）のままの暮らしをしていたかれらは、いったいどんな生きもの（ヒト）だったのでしょうか。……かれらは多分、野蛮未開の生活をしていたとしても、おそらくその代わり、ひとよりもヒト（動物）として、野生奔放な、自然のままの生命を、生き続けていたのではないのでしょうか。野生素朴な自然をはなれ、蝕まれた虚飾の生命を、生きているとしか思えない今日の人間よりも、原始自然の本来の生命を、強靱活達に生きていはいはしなかったのでしょうか。いずれにしても年少者と年少年代自然生命は、この原初人類における、原始野生の生命自然の脈流に位置しています。時代の支配を超える自然生命と、年少者と年少年代の生命の脈流に、あらためて目を注ぎ、見つめなおしてみる必要があるように思います。

（三）**子供期時代の消滅** 以上これまで繰り返えしみてきたように、年少者と年少年代の特質は、その原初性において、第一義的に生命（生物）的自然であってみれば、時代の変化に伴う、支配や制約をうけることはない。時代の変化の影響をうけないだけでなく、ひと（人類）それ自身が絶滅しないかぎり、消滅することもない。しかし他方子供と子供時代期観念は、前述したように、時代の所産であるがゆえに、時代が変われば変容する。変容するだけでなく、それを支える時代の背景が消失すれば、子供とその時代観念も消滅する。このことは裏返えしていえば、子供と子供時代観念を支える時代や文化なしに、子供も子供時代観念もまた、創生されはしないということである。事実、かつて往昔においては、わが国の場合も、西欧においても、子供不在と子供時代欠落というのが、むしろ歴史の常態であった。

上述これらのことを念頭に、今日の子供世界に、あらためて目をむけなおしてみると、その変化の著しさに、あらためて驚ろかされる。そのことは日常身近かな、子供と子供時代の諸相、例えば食べるものや着るもの、習慣や習俗、礼儀作法やことば遣い、そのほか茶飯の万事が、ひと昔まえとは違ってしまっていることをみても思いあたる。しかもこのような傾向は、日常生活上のことがらにとどまらず、ものの考え方や感じ方、行動の

仕方や生き方などの方面にまで、現われはじめてきている。新人類の出現などという流行語には、時代相応の変化を象徴する意味あいがある。

Postman は、以上このような時代の変化について、前出書「子どもはもういない」の以下の各章において、後述引用のように論じている。

はじめに(Ⅰ)つくられた子ども期(1)子どもがいなかったころ(2)活字と新しい大人の誕生(3)揺籃期(4)子ども期の移り変わり(Ⅱ)子ども期の消滅(5)映像文化子ども期(6)秘密のないメディア(7)大人——子どもの出現(8)消滅する子ども(9)六つの疑問

このうちまず同著、序章「はじめに」についてみると、そこでは中世には子供がいなかったこと、当時は大人と子供(7—17歳)との間に、ことさらな区別があったわけではないこと、子供は7歳になれば、すでに大人の仲間入りをしていたことなどについて述べている。つまりいってみれば、今日の子供あるいは子供時代観念とはいっても、それはどこまでも、歴史のある一時期につくられ、今日、いま消滅しつつある、社会的時代文化観念の一つにすぎないとして、以下引用のようにみている。

だが、私たちはまず、社会的事実と社会的観念を混同してはならない。子ども期という観念は、ルネサンスの偉大な発明の一つであり、おそらく、そのなかでも、すぐれて人文主義的な発明であろう。科学や民族国家、信仰の自由とともに、子ども期は、一つの社会構造、心理状態として、16世紀ごろ出現し、純化され強化されて現代にいたったのである。しかし、社会的につくられたものがすべてそうであるように、子ども期がひきつづきかならず存在するとはいえない。……子ども期と成年期との境界線が急速に浸食されつつあるという認識は、このことに注目している人たちのあいだではすでに広く行きわたっており、注目をほらっていない人たちにももしやと思われている。子ども期が最初どこで生まれたのか、ましてそれがなぜいま消滅するようになったかは、まだそれほどよく理解されていない。

つぎに第一章では、古代や中世になぜ子供がいなかったかを論じ、第二章では、近代印刷技術の発明を契機として子供期が出現し、第三章では、近代学校や家族、あるいは子供のマナーのつくられてきた経緯について触

れている。さらに第四章では、以上このほか近世以降の子供、あるいは子供期観念の移り変わりについて、例えば Rousseau の場合においては、以下のようにみている。

子ども時代という考えかたに二番目に大きな影響をあたえた18世紀の知識人は、もちろんルソーであった。ルソーには、子ども期がなぜ出現しどのように維持されるかがはっきりとはわかっていなかった（ロックにはわかっていた）が、かれは子ども期の発達に二つの大きな寄与をしている。その第一は、子どもはたんなる目的のための手段として大切なのではなく、本来大切なものだという主張である。子どもをあらゆる点で潜在的な可能性をもった市民、多分商人として見ていたロックとは、この点で大きくちがう。ルソーの考えかたはまったく独創的であった。

ルソーの第二の考えかたは、子どもの知的、感情的生活が大事だということだった。子どもの知的、感情的生活は、子どもたちを教え訓練するためにそれを知らなければならないからではなく、子ども期こそ、人間が「自然のままの状態」にきわめて近くなる生涯の段階だから大事なのである。ルソーは、このような状態をかなり評価したので、かれの知的な継承者もふくめてかれ以後これを取りあげた人はだれもいなかったほどである。……他方、ルソーは「エミール」に、「植物は栽培によって、人間は教育によって改善される」と書いた。ここでは、子どもは野生の植物にたとえられている。それが、本の学習によって改善されることはまずない。それは生まれながらにして自然に成長する。子ども時代に必要なのは、文明の不健全な排出物で窒息しないことだけである。ルソーにとっては、教育は本質的に引き算の過程であり、ロックにとっては足し算の過程である。だが、以上の二つの比喩は、たがいにとんちにちがっていても、ともに未来に関心をはらう。ロックは、教育が立派で多様、かつ内容の豊富な本を生むことをのぞんだ。ルソーは、教育が健全な一輪の花になることをのぞんだ。ここは、忘れてはならない重要な点である。なぜなら、今日の子ども時代についての比喩からは、未来にたいする関心がますます消え去りつつあるからだ。ロックもルソーも、将来についての大人の指導がなくても、子ども時代が存在できることを疑ったことはなかったのである。

また第五章以下、同九章までについてみると、第五章では、子供あるいは子供観念の消滅は、テレビなど今日におけるニューメディアの影響の結果であること、第六章では、またその影響が大人の秘密をなくし、大人と子供の境界をつき崩す作用をしていること、こうして大人——子供の出現

(第七章)によって、子供あるいは子供期の消滅に今日直面(第八章)していることについて述べている。

四六つの疑問 終わりに本書では、以下六つの疑問を出し、これらの疑問は、いずれも著者の「研究の途上のいくつかの時点で生じ」、「心からはなれようとしなかったもの」であって、本書は「それらの疑問に答えようとしてきた」ものであると述べている。

(1)子ども期は見つけだされたのか、それともつくられたのか。(2)子ども期の衰退は、アメリカ文化全般にわたる衰退をあらわしているか。(3)モラル・マジョリティなど根本主義派は、子ども期の維持にどこまで寄与したか。(4)子ども期の必要を維持する能力をもつコミュニケーション技術は存在するか。(5)子ども期の衰退をおさえるだけの強力で責任のもてる社会制度は存在するか。(6)いまおこっていることにたいして、個人的な抵抗は無効だろうか。

以上これら疑問のおもなもののうち、第一の「子ども期は見つけだされたのか、それともつくられたのか。」についてみると、著者は当然この点について、子供期観念は「生物学的必然ではなく、社会的につくり出されたもの」であるとしている。しかしそうはいっても、子供期観念が、まったくの文化の創出物であるとするならば、今日、子供期の復活復権のためには、社会的「情報環境の劇的再編」が必須不可欠であるとしている。しかし結論的にいえば、今日的社会状況は、けっしてそういうことにはならない。してみれば将来の研究が立証するかも知れない、つぎのような公式と期待に希望を寄せる以外にないのかも知れないとみて、上述の論旨をふくめ、以下引用のように指摘している。

本書は、子ども期が、生物学的な必然ではなく、社会的につくられたものであるという叙述からはじめた。……フロイト、エリク・エリクソン、アーノルド・ゲゼル、そしてとくにジャン・ピアジェのような研究者の権威をよりどころにして、一般的な意見は、観察できる子どもの発達段階は生物学上の必要によって支配されるとしている。実際、ピアジェは、自分の研究を「発生的認識論」とよんだが、それは、知的到達度の一段階からつぎの段階への子どもの進歩は、発生の

法則にしたがうということである。……もしピアジェが正しいとしたら、子ども期は、読み書き能力によってつくられたのではなく、発見されただけであり、新しい情報環境はそれを「消滅しつつある」のではなく、それを抑圧しつつあるだけである。

私は、ピアジェの研究には、本質的に歴史に無関係の研究方法からくる限界があると考えている。かれが観察したすべての子どもの行動は、はるか昔の時代には、まったくなかったか、すくなくともまったくちがっていたかもしれないことに、かれは不十分にしか目をむけなかったのである。とはいえ、私は、むしろピアジェが正しければと願う。ピアジェが正しければ、ほんのわずかのチャンスさえあれば、子ども期は自らを主張するだろうと思って元気をだしていいのかもしれない。なぜなら、すくなくとも永久に母なる自然をだますわけには、やはりいかないからである。しかし、もし子ども期が、私が信じたい気がしているように、文化のまったくの創造物だとしたら、堅固で明白な線にそっとういちどその姿をあらわすためには、子ども期は、私たちの情報環境の構造が劇的に再編されるまで待たなければならないだろう。そして、けっしてそういうことにはなりそうにない。

元気をだすために、将来の研究が立証するだろう、つぎのような公式と希望をもつことでよしとしたい。子ども期は、言語学習の類似物である。それは、生物学的基礎をもっているが、社会環境がきっかけをあたえ、育てないかぎり、つまり、それを必要としないかぎり実現されない。文化が、自然に反する専門化した複雑な技能や態度を覚えるのに子どもの隔離を必要とするようなメディアによって支配されるならば、子ども期は、あれこれの形態で、出現し、形成され、なくてはならないものになるだろう。文化のコミュニケーションの必要が、子どもたちの長期の隔離をもとめなければ、子ども期はこのまま黙していることになる。

このほか第四の疑問「子ども期の必要を維持する能力をもつコミュニケーション技術は存在するか。」に対する著者の見解は、今日以後の情報社会においては、情報社会に適合するためのコンピュータ操作能力を、十二分に身につける必要に迫られる。この必要不可欠性が、ひるがえってこれまでとは別の意味で、学校制度維持の重要性を増し、結果的に子供期の維持要因になるかも知れないとみている。

しかしそのようなメディアの潜在能力も、その使い方や利用の仕方によっては、子供期の維持に役立つどころか、「子ども期はさまたげられるこ

となく、忘却への道を歩みつつける」ことにもなる。本書ではその諸例を、以下趣旨の引用のように述べている。

メディアの潜在的な効力は、メディアが用いられる利用のしかたによっては、その力を失う。たとえば、ラジオは、本来人間の話言葉の力と詩的要素を豊かにし礼賛する能力をもち、世界には、ラジオをこのために使っている地域がある。アメリカでは、テレビとの競争の結果もあって、ラジオは音楽産業の付属物にすぎなくなっている。その結果、一貫した、発音が明瞭で、慎重な話しかたは、ほとんど完全に電波から消えてしまった（ナショナル・パブリック放送は、すばらしい例外だが）。したがって、将来一般大衆のなかで、筋みちの立った、論理的で複雑な思考をうながすのにコンピュータが使われるとはかならずしもいえない。たとえば、読み書きがよくできない多くの人たちが視覚的なコンピュータ・ゲームの奇術で遊び、わからずにコンピュータを使い、それに使われるようになったほうがいい経済的、政治的な利害があるのだ。こうして、コンピュータは神秘なものとして、官僚的エリートの管理下にとどまることになる。子どもたちを教育する必要もないだろうし、子ども期は、さまたげられることなく、忘却への道を歩みつつけるだろう。

著者の第五の疑問、「子ども期の衰退をおさえるだけの強力で責任のもてる社会制度は存在するか。」もまた、きわめて示唆的で暗示的である。著書は今日における、子供期の衰退の防壁となりうる社会制度は、一つには家族、もう一つは学校の二つしかないと指摘する。しかし今日の家族制度は、構造あるいは権威いずれも、著しく衰退しつつある。そのおもな原因は、親が子供たちへの情報提供に、支配力を失ったことにある。事実、今日においては、テレビなどがほんとうの親になり、子供たちは生みの親より、テレビという親と長い時間をすごしている。今日、親はテレビやレコード、映画などのうしろからついて歩く、第四または第五の親の地位に転落してしまっている。いずれにしても、メディアが子供の価値と感受性を熟成するうえで、家族の役割を著しく弱化しつつあることは確かである。

このほか本書の著者は、今日ほど親が子供の教育に、自信を喪失している時代もまたないと指摘する。いずれもメディアの影響が、拡大一般化さ

れた結果と無関係ではない。本書がそのことに関連して、つぎのように述べているのには、十二分に納得しうる理由がある。

さらに、多くの親が子育て能力に自信を失っているが、これはメディアの主権が拡大した結果と思われる。親たちは、子育てについてもっている情報や本能がたよりにならないと思っているのだ。その結果、親はメディアの影響に抵抗しただけでなく、子どもにとって一番いいことを知っていると言われる専門家にたよる。こうして、公共機関の立場を代表する心理学者やソーシャル・ワーカー、生活指導カウンセラー、教師などが、通常は招かれることによって、親の権威の領域に大きく侵入した。これは、昔から親子関係の特徴となっている親しみと信頼、誠実が失われるということである。実際、親子関係は本質的に神経症的であり、子どものことは家族よりも公共機関のほうがよく面倒を見てもらえると思っている人もいる。

子供期維持の防壁ともいうべき、もう一つの砦である学校も、家族の場合と同じほど、権威が失われ始めていると著者はみている。今日、根本から変化した、コミュニケーションの構造のただなかには、学校もまた変わらないわけにはいかないからである。事実、今日においては、学校はすでに子供の世話をする家というよりも、むしろ子供を閉じ込める場所になってしまった。とはいえそれでも著者は、学校は依然「子ども期の消滅に対する最後の防衛として有効」とする点においては、その希望の見解に変わりはない。以下著者の主張を引用すると、つぎのようになる。

学校についていえば、それは、子どもと大人には大きなちがいがあり、大人には子どもに教えなければならない大切なことがあるという仮説にもとづいて私たちに残された唯一の公共機関である。……根本から変化したコミュニケーションの構造のただなかには、学校は（マーシャル・マクルーハンの言葉をかりると）、子どもの世話をする家というよりはむしろ子どもを閉じこめる家になってしまった。教師たちは、もちろん、子どもたちをどうあつかわなければならないかについて困惑している。たとえば、読み書きを教えることがむずかしくなるにしたがい、教師たちは、このような時間がかかる仕事に情熱を失うまでになり、読み書きを教えるのをすべてやめてしまったら、なにか不都合なことでもあるのかと思っている。……学校が社会的傾向を導くことができるどころか、はるかに

強くそれを反映し、それに反対することがほとんどできなくなっていることはあきらかである。それでも、読み書き能力の産物である学校が、自らの出生への攻撃に簡単にくわわることはないだろう。いかに弱々しい努力とはいえ、学校は、あれこれのかたちで、子ども期の消滅にたいする最後の防衛としていぜん有効である。やがて、教師や管理者たちのすべてが、かれら自身、テレビ時代の産物になるときは、どんな力をもっていようと抵抗は失敗するだろうし、その目標も忘れ去られるだろう。

最後に第六の疑問、「いまおこっていることに対して、個人的な抵抗は無効だろうか。」においては、著者は今日における個人的抵抗の困難さを認めながらも、その必要性について以下のように強調している。

かれらは、事実上、文化の至上命令にidonでいるのである。このような親たちは、子どもたちが子ども期をもつことに力をかすだけでなく、同時に、一種の知的エリートを創造しているのだ。当面は、このような家庭で大きくなる子どもは、大人として、商売にも職業にもメディア自身にも恵まれることはたしかである。長い目で見てどういふことが言えるか？ つぎのことだけである。こうした時代精神にさからう親たちは、「修道院効果」とでもいっていいものに寄与するだろう。なぜなら、かれらは人文主義的伝統を生かしつづけることに力をかすだろうからである。私たちの文化が、文化に子どもが必要であることを忘れるなどとは思えない。だが、子どもが子ども期を必要としていることは半ば忘れ去られようとしている。忘れないと主張する人たちに崇高な仕事を成し遂げさせようではないか。

参 考 文 献

- (1)原田実 人間形成の明日 (2)中山一義 日本教育史 (3)Rousseau, : *Émile ou De L'Éducation*, (「エミール」押村襄訳) (4)Fröbel, : *Die Menschenziehung*, (「人間の教育」荒井武訳) (5)Ellen Key, : *The Century of the Child*, (「児童の世紀」原田実訳) (6)Dewey, : *Experience and Education*, (「経験と教育」原田実訳) (7)Comenius, : *Didactica Magna*, (「大教授学」稲富栄次郎訳) (8)M. Montessori, : *Education for Human Development*, (「人間らしき進歩のための教育」周郷博訳) (9)原田実 ヨーロッパ近世教育思想史 (10)Marie Winn, : *Children without Childhood*, (「子ども時代を失った子どもたち」平賀悦子訳) (11)Toffler, : *Future Shock*, (「未来の衝撃」徳山二郎訳) (12)Toffler, : *The Third*

Wave, (「第三の波」徳山二郎監修) (13)Coveney, : The Image of Childhood, (「子どものイメージ」江河徹監訳) (14)Ariés, : L'enfant et la vie Familiale sous L'ancien regime, (「子供の誕生」杉山光信訳) (15)Rochefort, : Les Enfants D'abord, (「追いつめられた子どもたち」西川祐子訳) (16)石川松太郎編, 日本の子どもの歴史 (17)Elkind, : The Hurried Child, (「急かされる子供たち」久米稔訳) (18)本田和子 異文化としての子ども (19)石川謙 我が国における児童観の発達 (20)神宮輝夫 児童文学の中の子ども (21)Wolfenstein, : Childhood in Contemporary Cultures, (22)山口昌男 挑発する子どもたち (23)Postman, : The Disappearance of Childhood, (「子供はもういない」小柴二訳)